

書評

小山 透 著

『科学技術系のライティング技法』

慶應義塾大学出版会、2011年4月刊

Introduction to Writing Science and Technology Documents

Authored by Toru Koyama
Keio University Press, April 2011

評 武藤 佳恭

慶應義塾大学環境情報学部教授

Reviewed by Yoshiyasu Takefuji
Professor, Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

科学技術系のライティング技法の著者の小山氏が共立出版の雑誌「bit」編集長をされている当時、小山氏からたまたま一時帰国している私に原稿依頼がありました。これから、世の中はインターネットの時代になるので、インターネットの原稿を書くことに同意しました。1991年から“インターネットの遊び方”の原稿を1年半の連載として、米国のオハイオ州クリーブランドのケースウェスタンリザーブ大学から毎月電子メールで送っていました。今では電子メールで原稿を送ることは当たり前かもしれませんが、当時では画期的なことで、原稿は航空便や宅急便（FedEx や UPS）で国際配達していました。1991年、日本には商用のインターネットプロバイダやインターネットサービス業者が全くない時代で、一般の人は電子メールを利用できませんでした。小山氏は、苦勞して電子メールアカウントを作られたのだと思います。小山氏は、おそらく編集者として日本人初のインターネットユーザーではないかと思います。

1983年、フロリダ州のタンパに住んでいた私は、

自宅からインターネットを使っていました。米国でも1983年当時はインターネットサービスプロバイダやサービス業者はありませんでした。自作の音響カプラーモデム（1986年にFive Dollar 300 baud modemと題して論文・記事にしました）を使って、南フロリダ大学のコンピュータサイエンス学科に接続してインターネットを利用し、電子メールを送受信したり、電子図書館のデータベースにアクセスしたりしていました。音響カプラーモデム（当時、買うと10万円ぐらい）は音波でデジタル信号を送受信する装置です。自作のモデムでは、家内がまな板の上で食材を切ると、文字化けするような脆弱なものでしたので、ファイルの編集時は静かにするようお願いしていました。

さて、202ページの本は科学技術系のライティング技法と題していますが、単なるライティング技法に留まらず、ライティングに役立つ情報が盛りだくさんです。ライティングの観点から、キャリア構築のための8要素を記述しています。その8要素とは、1. 一般社会常識、2. 教養、3. 専門知識、4. コ

コミュニケーション・スキル、5. 自己管理、6. 人脈、7. 経験の集積、8. 心身の健康です。良いライティングには、それらの8つの要素を備えた“実力者”になれと言っています。

科学技術系文章の5要素は、次の5つです。1. ストーリー性、2. 品格、3. 精確性、4. 分かりやすさ、5. 読みやすさ。また、ライティングの上達の方策が簡潔に記述されています。その方策とは、1. 準備する、2. 読み込む、3. 書き込む、4. 批評してもらうことです。

11章からなる本書には、各章の終わりには必ず、小山氏が実際に接した科学技術ライティングの日本の達人たちの格言とエピソードが載せてあり、各章の内容が一行の格言に集約されています。ライティングの準備、文書と文章、文書の押さえどころ、言葉の深みが各章に記述されています。数字、数式、記号、単位の使いこなし、専門用語の表記、表現の工夫、ライティングにおける法律、文章と文書の仕上げ、最後の章に話の技法が記述されています。話の上手な人は書くのがうまい。書くこと、話すこと、聴くことには情報伝達の上で共通点があり、ライティングをうまくするには、うまく話すこと、うまく聴くことが役立つと記述されています。

各章のタイトルと格言とは：

第1章のライティングの目標と目的では「何をかかないか、ですね」、

第2章のライティングの準備では「分かりやすくなければ、ね」、

第3章の文書と文章では「これで、いいですかね?」、

第4章の文書の押さえどころでは「分かると面白くなって、嬉しいでしょう」、

第5章の言葉の深みでは「のんびり考えて、人と話すことね」、

第6章の数字、数式、記号、単位の使いこなしでは「どこかに、まだあるよ」、

第7章の専門用語の表記では「これ、面白いですよ」、

第8章の表現の工夫では「おもしろいもんが、ね」、

第9章のライティングにおける法律では「ちょっと、考えてみましょう」、

第10章の文章と文書の仕上げでは「ほら～、良くなったろう」、

第11章の話の技法では「もう、いい頃ですかね?」、

各章の内容が想像できるような簡潔な格言で理解しやすくなっています。

ライティングの準備では、1. 心の準備、2. ライティング環境の整備（文房具と基礎資料、メモ書き、ノート作り、場所と時間の確保）、3. 題材の準備（構想、情報整理）、4. 執筆のプロセス（降順法、繰返し修正法、昇順法、重点優先法、サンドイッチ法）、5. ライティングの作法（文書での作法、文章での作法、コピペ問題）、6. 書く上での留意点が重要であると述べています。

本書の冒頭には、経験豊富な編集者の視点から日本語教育の問題点を鋭く指摘しています。わが国での国語教育は、感性・情緒の授受が主体で、情報伝達性を重視していない。本書の目的は、日本の国語教育に欠けているライティングにおける情報伝達の技法を詳しく解説することであると述べています。

本書では、単に科学技術系の上手な論文作成だけでなく、ビジネスでの実用文、仕事文の書き方やまとめ方が記述されています。本書を一行で表現すると、“ライティングの達人になるには、人格・実力を磨きなさい”と要約できます。他の情報伝達技法としてのプレゼンテーションおよびディスカッションについては、ライティングと共通する部分も多いので、それらの主要なポイントも併せて学習していく形式をとっています。

インターネット時代が生み出した、社会問題である“コピペ問題”やその他にも触れ、科学技術系のライティング技法での注意点を解説しながらライティングでの重要な点を指摘しています。

著者の小山氏はSFCで「ライティング技法ワークショップ—科学技術系のライティング」という授業を非常勤講師として担当し、2009年度秋学期から2011年度秋学期までの3年間にわたってSFCの

学生たちに教えていただきました。

本書は、情報を正しく伝えたい、ライティングの基礎を学びたい人にお薦めしたい一冊です。

[2012. 3. 13 受理]

[2012. 5. 30 採録]